

石岡市鹿の子

石岡市教育委員会 谷仲俊雄

古墳の立地・群構成

鹿の子大塚山古墳は、茨城県石岡市鹿の子三丁目に所在する古墳です。恋瀬川と山王川にはさまれた台地上に位置し、南西約 1km には古墳時代後期から終末期の群集墳である染谷古墳群が存在しています。南東には国衙工房である鹿の子遺跡、特別史跡常陸国分尼寺跡、特別史跡常陸国分寺跡、史跡常陸国府跡が位置しています(図1)。

現在本古墳は単独で存在しています。市内照光寺所蔵の正徳3年(1713)の府中村上染谷絵図には本古墳が黒点で描かれていますが、その周辺にはそれよりやや小さな黒点が 10 ヶ所余り描かれています(図3、石岡市文化財関係資料編纂会 1996)。これらは現在残っていませんが、もともとは「鹿の子古墳群」と呼べるような古墳群を形成していたと考えられます。本古墳は、そのなかで最も規模が大きな古墳であり、現在まで良好に残る唯一の古墳と言えます。

地元では「大塚山」と呼び、「兵庫頭のお墓」と口承され、荒らすものには腹痛を伴う祟りがあるとされていました。昭和 19 年、石岡に駐留していた橋部隊の一分隊が防空壕(戦車壕)を掘削したところ、隊長はじめ兵隊たちは悪寒を覚え、悪夢に襲われるなどして、作業は中止になったと言われています(今泉 1956)。現在でも墳丘西側の斜面に残る大穴が、この壕の跡とされています。

古墳の概要

調査歴 平成 10 年度に石岡市教育委員会が、測量・確認調査を行いました(青木・多ヶ谷 2001)。

墳形・規模 墳丘径約 28m、高さ約 4.8m の円墳と考えられます(図4)。

外表施設 古墳の周囲には幅 9m 程度の周堀がめぐっています。これを含めた全長は 46m となります。

墳丘構築法 墳丘は全体が盛土で構築されています。ローム主体の土と黒色土を墳丘上部では 10~30cm、下部では 40~60cm の単位で互層状に盛土していました。

埋葬施設 墳頂部は 30cm 程度掘り下げを行っていますが、埋葬施設は確認できていません。また、ピンポールによるボーリング調査でも石棺材は確認できていません。横穴式石室や木棺、あるいはより深い位置や裾部に

箱式石棺が存在している可能性が考えられます。

築造時期

出土資料から 本古墳と同規模以上の古墳の場合、古墳時代中期から後期に築造されたものであれば、埴輪を樹立しているのは通有です。本古墳では埴輪片の出土は皆無であることから埴輪が樹立されていなかった、したがって古墳時代前期、もしくは後期末葉から終末期の築造が想定できることになります。

墳丘から 墳丘径に対して墳頂部の平坦面が狭いという特徴があります。墳頂部の平坦面は、古墳時代中期から終末期になるにしたがって縮小するという傾向があり、古墳時代後期中葉以降の築造が想定できます。さらに、終末期でも後半になると、円墳から方墳への墳形の転換傾向がうかがえます。したがって、古墳時代後期中葉から終末期前半の築造が想定できます。

また、終末期の風返浅間山古墳(かすみがうら市)の墳丘と類似しており、1/2 相似墳の可能性も考えられます。

小結 古墳時代後期末葉から終末期前半、7 世紀初頭から前葉の築造と考えられます。風返浅間山古墳の墳丘との類似を積極的に評価すれば、終末期前半に限定することも可能となります。

古墳の評価

石岡市内の終末期古墳としては、最大級の規模を誇る古墳となります。本古墳の造営に続く 7 世紀後半には、茨城郡寺や常陸国府が造営されます。本古墳は同一台地上で最も国府に近い古墳であり、古墳から律令国家への動向を考えるうえで鍵となる古墳と言えます。

文献

青木 敬・多ヶ谷香里 2001「茨城県石岡市鹿の子大塚山古墳 確認調査報告」『石岡市遺跡分布調査報告』

石岡市文化財関係資料編纂会 1996『石岡の地名』

今泉義文 1956「さわると祟りある 大塚山古墳」『石岡市郷土誌資料』

谷仲俊雄 2017「茨城県石岡市鹿の子大塚山古墳について」『婆良岐考古』第 39 号

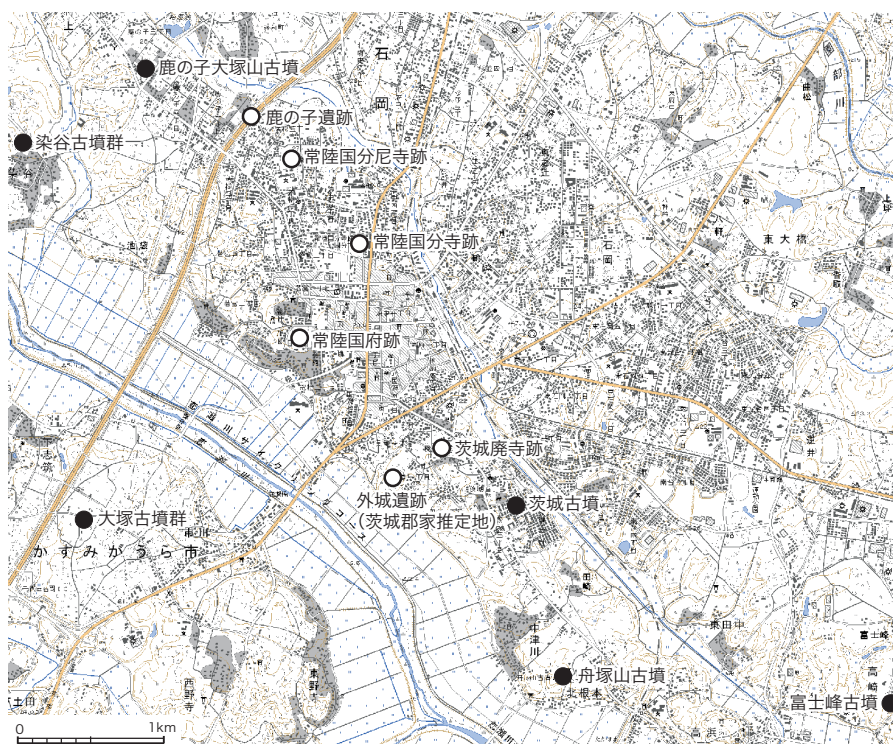


図1 鹿の子大塚山古墳の位置と周辺の遺跡（1）

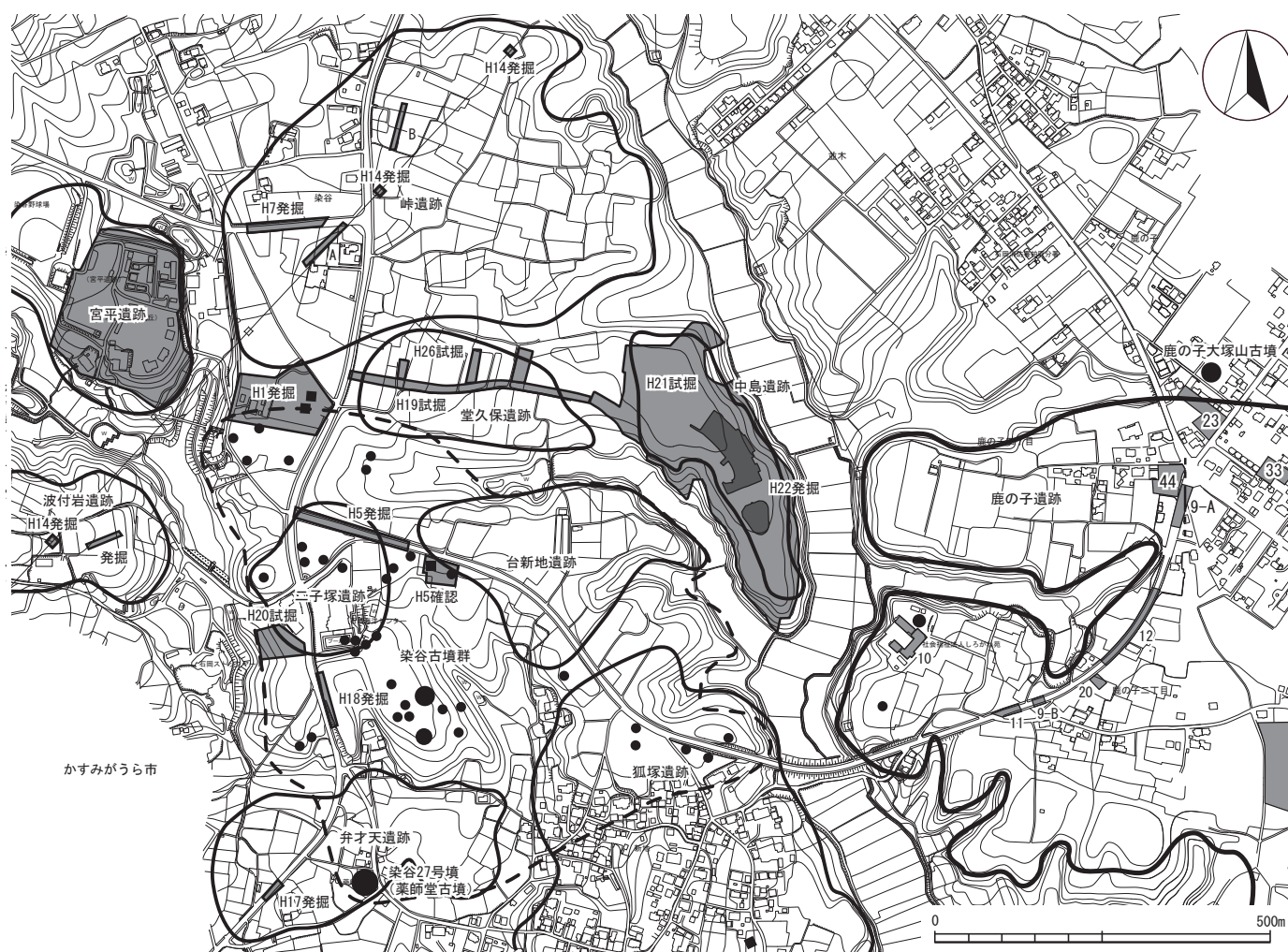


図2 鹿の子大塚山古墳の位置と周辺の遺跡(2)

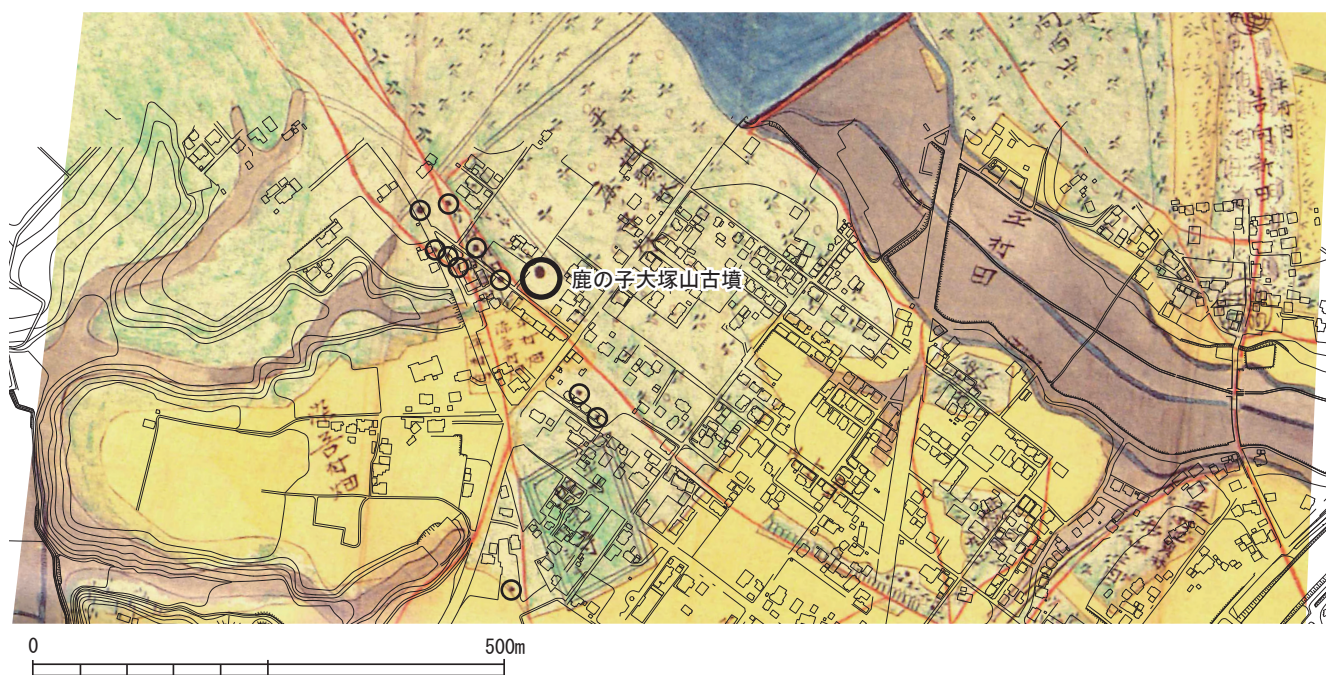


図3 正徳3年(1713)府中村上染谷絵図 (S= 約 1/800)

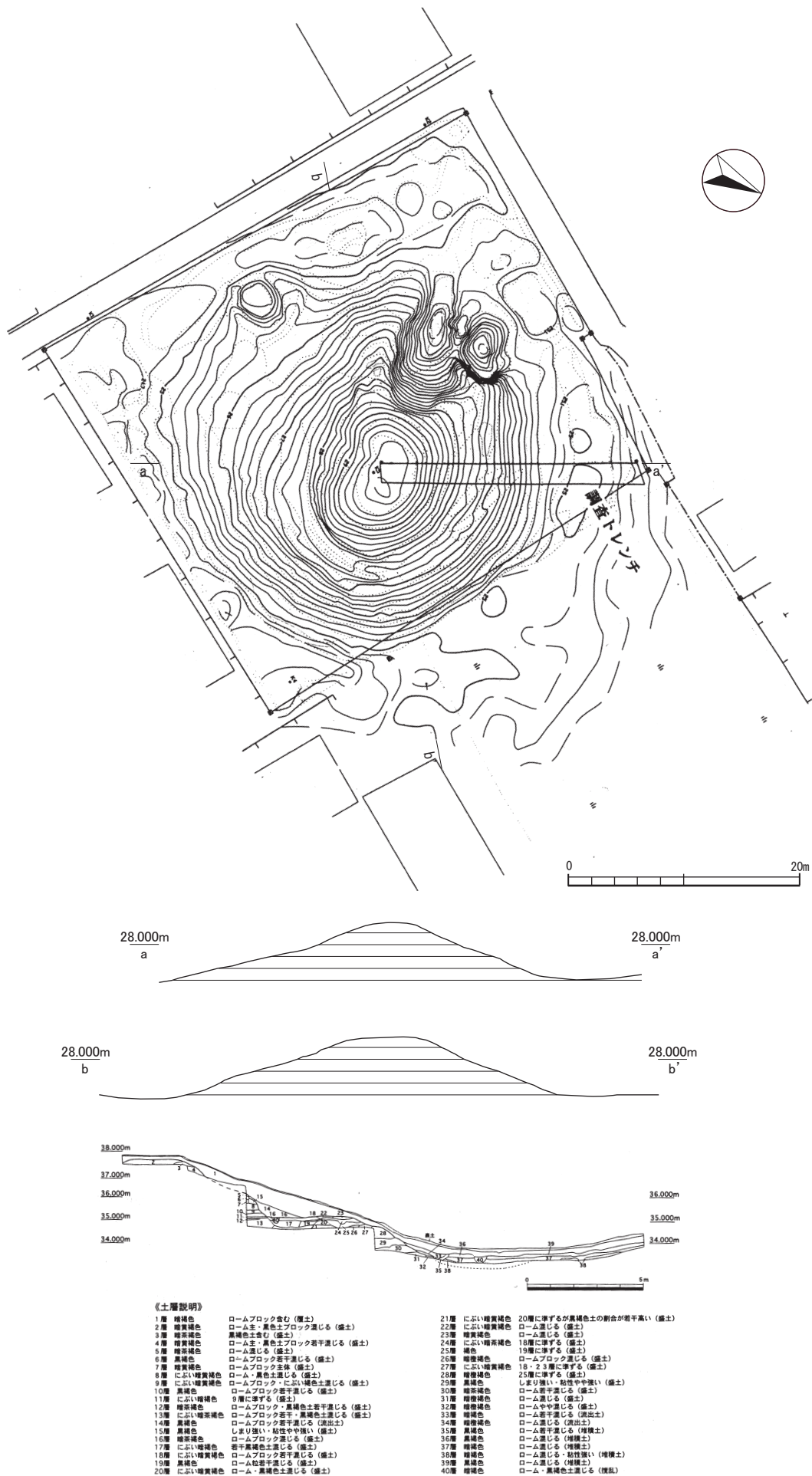


図4 鹿の子大塚山古墳 測量図・エレベーション図 (S=1/500), 土層図 (S=1/250)

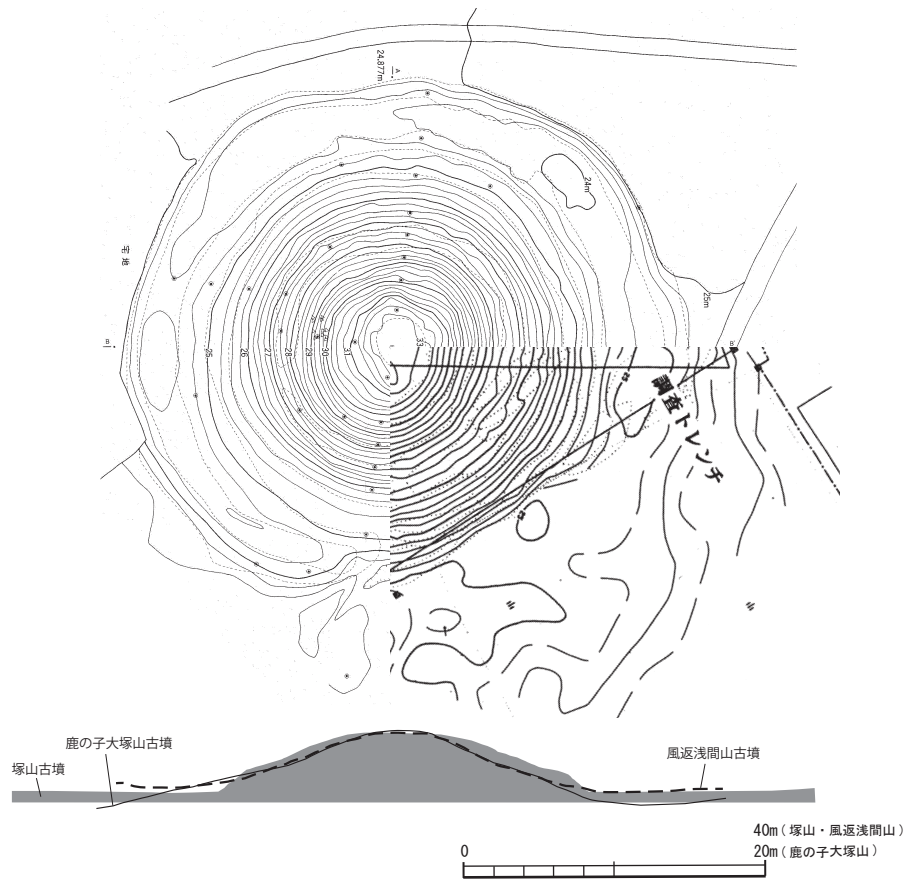


図5 鹿の子大塚山古墳と風返浅間山古墳・塚山古墳



図6 常陸国府周辺の後期末～終末期古墳位置図

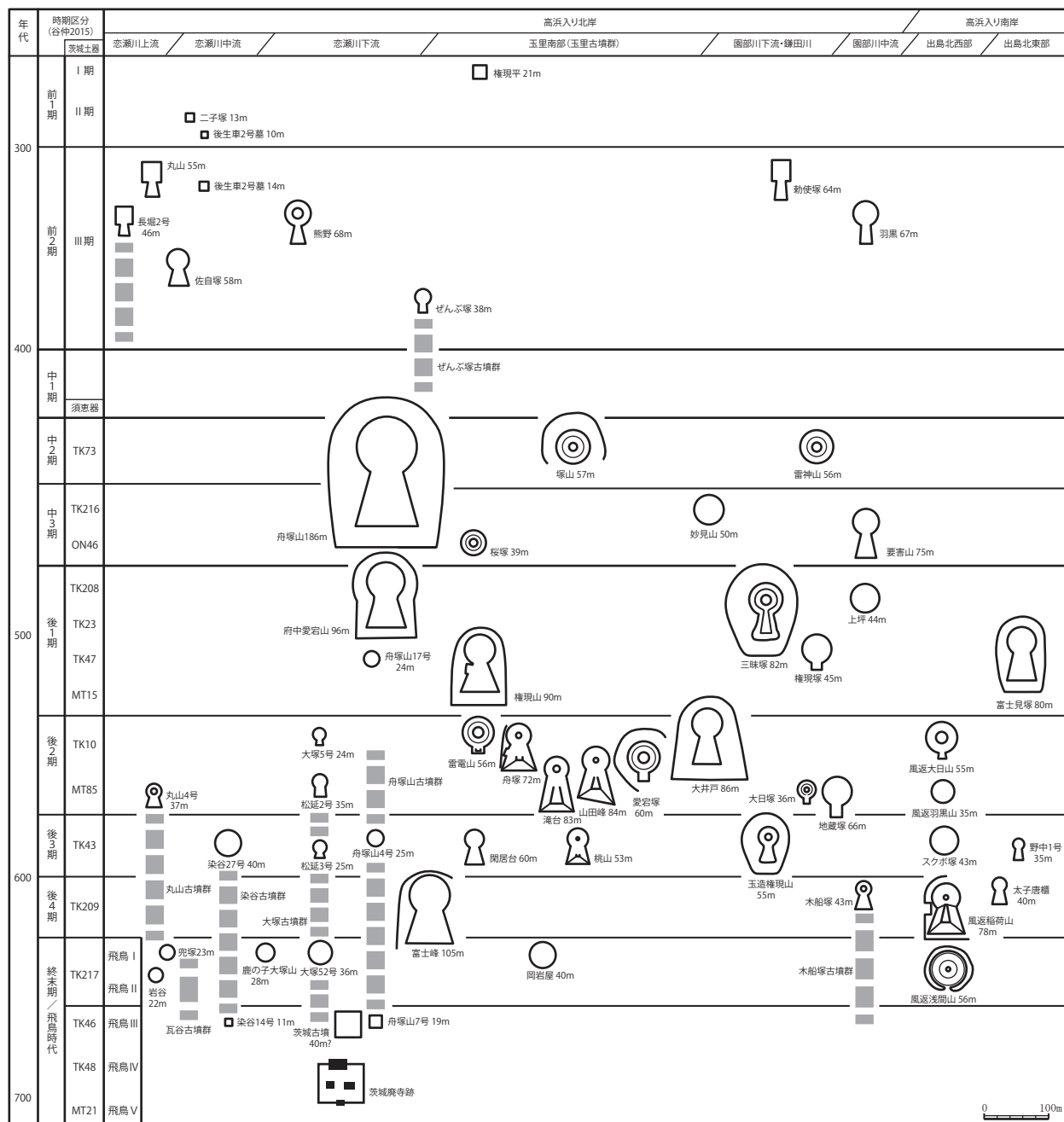


図7 霞ヶ浦高浜入りの古墳編年